

仏教用語に学ぶ

「仏教用語は難しい」とよく言われます。

確かに、煩惱即菩提、非有非空、不一不異というような言葉を聞いて、「なるほどそうか」とうなづける人はいないと思います。

言葉は難しいのですが、言っていることは、「偏つてもものを見てはいけない。ありのままに見なさい。とらわれてはいけない」という、至って分かりやすいことなんです。

煩惱と菩提、有と無、一と異は相対するものですから一見、まったく違うものに見えるが、それは我々の迷いの心に原因があるのであって、ありのままに見れば、同じだということです。

そのことを「不一不異」という言葉で説明してみましょう。

不一というのは、「一にあらず」ですから「同じではない」ということです。また不異は「異ならず」ですから「同じである」ということになります。

「同じではないが、同じである。同じだけれども同じでない」ということです。

何やら訳が分からなくなりそうですが、例えば「水」ということを考えてみれば分かります。水は環境や条件が変われば雨、雪、氷といった異なった姿になります。すなわち不一です。また、異なった姿とは言え、水ということから見れば、すべて同一ですから不異ということになります。

このようにものを見るのに両面（不一と不異）を同時に見ることによって初めて偏らない見方が出来るのです。

しかし、これだけでは哲学です。今現に、さまざまな問題を抱えながら生きている私たちの役には立ちません。

そこで、私はこの言葉を次のようにしてみるのです。

不一の一を「Aの立場の者」、不異の異を「Bの立場の者」に置き換えるのです。すると、不一不異は「不A不B」ということになります。

このAとBは相対するものですから、人間社会では夫と妻、親と子、嫁と姑、男と女等々、ありますが、それを「不A不B」に当てはめると「不夫不妻」「不親不子」（以下も同じです）という図式が出来ます。

これをどう解釈するのかというと、「お互いが自分の立場を否定し合うことによって、お互いを肯定する世界が生まれる」と解釈するのです。

これは、私たちが衝突（喧嘩）した時の解決方法になると思います。

ここで言う、自分の立場を否定するというのは、「我が身の至らなさに目覚める」というこ

とです。

私たちが衝突するのは、いつも「わしは正しい、間違うておらん。間違うとるのはお前じゃ」というところにあります。

ところが人間社会は相対の世界ですから、どんな衝突でも、片方が100パーセント正しいということはありません。

ですから、お互いが「わしは正しい」と言い張るだけでは、どこまでいっても問題は解決しません。

すると、それを解決するには、自己を否定する（我が身の至らなさに目覚める）以外方法はないということになります。

ところが、口で言うのはたやすいですが、これがまことに至難のことです。

親鸞聖人も「難中の難、これに過ぎたるはなし」とおっしゃっています。

よく「わしのことはわしが一番よう知つとる。至らんことも分かつとる」と言いますが、これは普段の冷静な時だけです。

もし何かのことで衝突をして、「本当にお前の心は曲がつとるわ」と言われたらどうでしょうか。「何を言うんじゃ。お前のほうが曲がつとるじゃないか」と、とたんに相手の非だけを責めるのです。

そんな時、「こんなことで衝突して、つまらん人間だなあ」などとは露ほども思いません。せいぜい「そりゃーわしも悪かったかもしれんが、お前も、もうちょっと考えてもらわにゃー」と言うぐらいなことです。

ことほど、自らの非を認めることは至難のことなのです。

そこに私の姿をありのままに写し出す「鏡」というものが必要になってくるのです。

その「鏡」になるものが仏さまの智慧です。その仏さまの智慧の目に見抜かれた私を見ていくのです。

そうすれば、我執（自分が一番可愛いという心）を軸に頭の下がらんお粗末な自分が見えてきます。そんな我が身の姿が明らかにされると、「至らぬ我が身だなー」と頭が下がってくるのです。

その頭が下る時「不一不異」の仏教用語が、現実生きる者の大いなる智慧になってくるのです。

重ねて言いますが、私たちの人生に起こるあらゆる問題を解決する道は「至らぬ我が身に目覚める」というただ一点にあります。

そうして、そのような歩み続ける者を阿弥陀さまは、「何と見事に人生の難問題を解決する者よの一。まるで泥沼に根を下ろしながら、泥沼とは似ても似つかない美しい花を咲かす蓮の花のようではないか。（仏言広勝解者、是人名分陀利華）」とほめたたえておられるのです。

平成15年4月 「光明寺だより27号」より